



MONGOLIA

学校名：小平市立小平第四小学校

氏名：吹越 菜央

[担当教科：小学校全科]

- 実践教科等：生活単元学習
- 時間数：4時間
- 対象生徒：特別支援学級(全学年)
- 対象人数：19人

1 単元名

たったひとつの まあるい ちきゅう

2 単元の目標 (ESD の能力・態度)

1～3年生

- ・自分たちの国とそれ以外の国があることを知る。(多面的・総合的に考える力)
- ・モンゴルの学習を通して他国の言葉、食べ物、着るもの、遊びに興味をもつ。(繋がりを尊重する態度)
- ・実物に触れ、五感を使って新しい体験や発見をすることができる。(進んで参加する態度)

4～6年生

- ・モンゴルについて知ることで世界の国々に興味・関心をもつ。(進んで参加する態度)
- ・モンゴルの学習を通して他の国と自分の国との生活や文化の違いを知り、自分の生活を振り返る。(繋がりを尊重する態度)
- ・モンゴルで衣食住に必要なものの実物を見たり、触れたり、口にしたりと五感を使って異文化に触れることでより興味・関心を高める。(多面的・総合的に考える力)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・日本との生活の違いに気付く。【多様性】
- ・外国の生活を知ることによって異文化を受け入れ、自国の文化に興味・誇りをもつ。【相互性】

4 単元の指導について

(1)教材観

特別支援学級である本学級で発達段階の異なる全学年の児童に、同じ空間でどのように伝えていくのかということを中心に大きな視点として考えてきた。これまでの彼らとの関わりや教科指導を通して、彼らは視覚的に見たり、実際に触れたりしながら体験的に学ぶことで理解を深めることができることを実感している。このようなことから本単元ではモンゴルについての学習を通して、国際理解の第一歩として日本とは異なる外国の生活や文化を、人間が生きていくうえで必須となる「衣食住」をテーマにしてできる限り本物に触れ、体験的に学べるようにする。モンゴルにおける実際のものでできるだけ多く見せたり、触れたりして児童が五感を使って異文化に親しむことができるように設定した。

「衣食住」の(衣)の部分では、モンゴルの日常生活で使われている本物を見せていく中で、民族衣装のデールを着る体験をし、(食)の部分ではモンゴルの伝統料理であるボウズ作りを行い、スーターツァイとともに食べ、(住)の部分では遊牧民の家であるゲルの中に入り、遊牧民生活を自身の身を以て体験する。体験活動を通してモンゴルの生活や文化を知り、そこから自国への理解を深め、他者を理解することに繋げていけると考える。更に途上国である「モンゴル」と先進国「日本」の生活の違いから互いの良さに気づき、日本を誇りに思う気持ちをつくるきっかけとする。

(2) 児童生徒観

本学級の児童は幼い頃にアメリカに住んでいた経験のある児童が1名おり、卒業生にはフィリピン人を母にもつ児童もいる。また国旗に非常に強い関心を示している児童や、名前をローマ字で書くことがかっこいいと感じ、英語に興味をもっている児童もいる。このように様々な国に関して興味を抱いている児童が少なからずいる。2年生以上を対象として月に1回程度行っている外国語活動の時間には、歌やゲーム、ダンスを取り入れながら英語を通して異文化に親しんでいる。回数を重ねるごとに英語を発することに抵抗を示す児童が減り、簡単な受け答えを英語やジェスチャーを使ってできるまでになっている。体験や五感を使っでの活動の成果として、やはりダンスや手遊びなどで体を動かしながら言語を取り入れることで、「楽しい」という思いとともに理解し易くなっている様子が見て取れる。そしてイースターやハロウィン、クリスマスなどの行事的な活動では飾りを作ったり、歌を歌ってゲームをしたりと体験できる機会を設けてきた。「楽しい」と思える体験から外国に対して抵抗なく身近に感じられるようになってきていると感じている。

また、全学年が在籍しているという利点から、高学年が低学年をサポートするということが当たり前に行える児童が多くいる。このようなことから、今回の体験的な活動にも縦割りでも活動する機会を多く取り入れ、異学年同士が共に学べる環境づくりも大切にしたい。

(3) 指導観

社会のグローバル化が進み、個人の生活においても外国人と触れ合う機会が増えた。このような状況の中で、言語や文化の異なる人々を理解し、協力し合いながら共に生きていくことで世界の平和を実現していくことが重要である。その第一歩として国際理解教育や外国語活動を通じて広い世界を知ることの楽しさ、世界の人々と出会い、繋がることの素晴らしさを、将来を担うたくさん子どもたちに伝えたい、という思いがある。そんな中「教師海外研修」において、特別支援教育にも国際理解教育にも必要なことの共通点に気付くことができた。それは「他者理解と自己理解。そこから繋がる地球の幸せな未来」であり、これは私自身が子どもたちに伝えていきたいことである。相手の気持ちを汲み取ったり、自分の気持ちを表現し、人とのコミュニケーションをとることを苦手とする特別支援学級の子どもたちにとって他者との関わり方を学んだり、自分の思いを相手に上手に伝える方法を学ぶことはとても大切である。様々な場面での関わりの中から相手を理解することで自己を理解し、互いにとってより良い関係を築いていくことは、彼らがこれから社会に出ていき、生きていく上で絶対に必要なスキルである。そしてこれは国際理解教育にも言えることであると考えます。

地球にはたくさんの国があり、他国を知ることによって自国に対する理解を深め、互いに支え合い、相互依存しながら幸せな地球の未来を目指している。「他者理解・自己理解」を深めることによって新しいものの見方や生き方もできる。丸い地球に住む世界中のみんなが互いの違いを認め合い、理解し、更に自己理解を深めていくことができれば人々はお互いに協力し合い、幸せな世界の実現に繋がると考える。このような視点をもって国際理解の指導にあたる。

5 評価基準

観点	他国の生活や文化に対する関心・意欲・態度	他国の生活や文化に対する思考・判断・実践	他国の生活や文化に対する気付き
評価規準	<p>[1～3年生] 実物に触れ、体験活動を通して新しいことを知る楽しさを感じている。</p> <p>[4～6年生] 体験的活動を通して外国には様々な生活や文化があることや日本との違い、その良さについて興味、関心をもち、進んで活動に参加している。</p>	<p>[1～3年生] 体験的活動を通して自分が感じたことを言葉や身体で表現することができる。</p> <p>[4～6年生] 体験的活動を通して外国の様々な生活や文化に対して自分の思いや考えをもっている。</p>	<p>[1～3年生] 体験的活動を通して世界にはたくさんの国があり、他国には日本とは違う生活や文化があることに気付いている。</p> <p>[4～6年生] 体験的活動を通して他国と自国の相違点や共通点を知り、多様なものの見方や考え方があることに気付いている。</p>
評価方法	学習の様子	発言	学習の様子・発言

6 単元の構成

※本単元では、全学年に対して一斉に授業を実施したため「全学年で学習を行うにあたっての留意点」の欄を追記した

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容	全学年で学習を行うにあたっての留意点
1	体験しよう！ 草原の国モンゴル 『衣(食)住』	[1～3年生] ○地球儀を使った学習を通して自分たちが生きる地球だということを知り、興味をもつ。 ○モンゴルにおける様々な実物に触れることで日本とは違うモンゴルという国を知る。 [4～6年生] ○丸一つの地球にはたくさんの国が存在することを知る。 ○たくさんの国の中のモンゴルを通してモンゴルの生活や文化に興味をもつ。	①地球儀を使って私たちが住む地球は丸いということや、日本をはじめ、丸い地球の中の様々な国の位置を知る。 ②日本で活躍するモンゴル人力士の写真を掲示し、彼らの国モンゴルと日本の違いをパズルゲームを通して知る。 ③パズルを完成させた後、それらの実際のものを見たり、触れたりしながらより理解を深める。	・丸、三角、四角の物に実際に触って地球の形を理解できるようにする。 ・縦割りグループで高学年を中心に、どうしてモンゴルカードだと思うのか、どうして日本カードだと思うのか意見を出し合いながらパズルのカードを完成させる。
2	行ってみよう！ モンゴルのゲルのお家 『衣食(住)』	[1～3年生] ○中庭に建てられた実物のゲルの中に入り、自分の住む家とモンゴルの家の違いに気付く。 ○夏休みのお手伝いを思い出し、自分が家族の為にできるお手伝いを考える。 [4～6年生] ○中庭に建てられた実物のゲルの中に入り、体験を通して自分の住む家と比べ、自分たちの生活との相違点や共通点に気付く。 ○ゲルに住む子どもたちの生活を知り、自分の家族の中での役割を振り返る。	①中庭に建てられた実際のゲルを見たり、中に入ったりして遊牧民の家の生活を体験をもって知り、日本の家との違いを感じる。 ②日本の家にあるものとモンゴルの家にあるものをイラストカードを使って考える。そこから日本とモンゴルの生活の共通点と相違点に気付き、考えを深める。 ③ゲルに住んでいる子どもたちの生活を知り、自分自身の家族の中での役割を考える。	・実際のゲルを見ることで、より具体的に遊牧民の生活のイメージを膨らますことができるようにする。そして日本にもモンゴルにもある物と異なる物があることに気付けるようにする。 ・夏休みの宿題だったお手伝いを思い出すことで考えやすくする。
3 4	食べてみよう！ モンゴル料理 『衣(食)住』	[全学年共通] ○モンゴルの伝統料理「ボウズ」を実際に作り、味わうことでモンゴルの食文化に触れる。	①縦割りグループに分かれ、リーダーの児童を中心に手順を追って作業を行う。 ②蒸し器で蒸す際は教師や介助員が行い、児童はその様子を観察する。 ③出来上がったらみんなで揃って「いただきます」をする。また、モンゴルのお茶「スーテーツアイ」も一緒に飲む。	・縦割りグループで番号を決め、その番号ごとにそれぞれの仕事を与える。グループの中での自分の役割を理解しながら作業を進められるようにする。

7 授業事例の紹介

小単元名【行ってみよう！モンゴルのゲルのお家】

(1) 指導案

(ア)実施日時 10月25日(土)第2限 ※学校公開日

(イ)実施会場 ならのみ学級 大教室・中庭

(ウ)本時の目標

1～3年生

- 本物のゲルの中での体験からモンゴルと日本の家の違いに気付く。
- 家族の中での自分の役割として自分にできることを考える。

4～6年生


- 実物のゲルでの体験を通して自分の家と比べ、それぞれの生活の違いを知り、モンゴルのゲルでの生活から自分の生活を振り返ることができる。
- ゲルに住む子どもたちの生活を知り、自分の家族の中での役割を考えることができる。

(エ)指導のポイント

本物のゲルを中庭に建て、その中で授業を展開することによって、写真やイラスト、教師の話からでは伝わりにくいモンゴルの雰囲気を感じることができ、より理解を深めることができると共に日本との違いに気付きやすくなり、日本の良さ、他国の文化の良さに気付くことができる。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)	
導入 10分	1・前回の学習で使った教材を提示し、モンゴルの学習をしたことを思い出させる。	1・前時の学習の振り返りをする。	全体指導	○前時で使用したモンゴルの国旗や力士の写真、ゲルの写真を見せながら思い出させる。	★国旗や力士、ゲルの写真を見て前回学習したモンゴルを思い出そうとしている (学習の様子)	
	どこでもドアでモンゴルへ行こう！					
	2・アニメキャラクターのイラストを掲示し、「どこでもドア」を見せ、これを使ってモンゴルに行くことを伝える。 3・教室で並ばせて中庭へ移動する。ゲルが見えないよう手前で止まり、「どこでもドア」の中を低学年から一人ずつくぐるよう指示する。	2・アニメキャラクターの「どこでもドア」を見て本当にモンゴルに行くんだ、という雰囲気味わう。 3・教室で静かに並び、中庭へ移動し、一人ずつ「どこでもドア」をくぐってゲルの中に入る。		○アニメキャラクターに「どこでもドア」借りてきた設定にし、ドキドキした楽しい雰囲気を作る。 ○興奮した気持ちがありながらも静かに落ち着いて移動できるよう声をかける。また低学年から順番を守ってドアをくぐるようにルールを確認する。	★前の人との間隔に気をつけて、静かに落ち着いて移動している。 (学習の様子)  どこでもドア	
展開 20分	『ゲルの中での学習活動』					
	4・ゲルの中に入り、ホワイトボードに注目させる。ホワイトボードに貼られたイラストカードを、モンゴルの家にあるものと日本の家にあるものに分けることを伝え、子どもたちの考えを引き出す。 5・特に以下の3つについて詳しく触れる。 ・トイレ ・水(水道) ・馬	4・ゲルの中に入り、日本の家にあるものとモンゴルの家にあるものにイラストカードを分ける。 5・特に日本の生活とは大きく異なる3つについて写真を見ながら違いに気付く。 トイレ→青空トイレ 水→水瓶にためて使う。 馬→日本で言う車の役割	全体指導	○日本と同じものもあり、違うものもあることに気づけるように両方のイラストカードを提示する。 ○写真を使って目で見て違いがよくわかるようにする。	 ゲルの中での学習活動の様子 ★モンゴルのゲルの家には日本とは異なる生活習慣があることを理解している。(発言・学習の様子)	

<p>まとめ 15分</p>	<p>6・小さな子どもが手伝いをしている写真を提示する。また、その様子を見て思ったことや感じたことを発表させる。また、夏休みに家庭で行ったお手伝いを思い浮かべよう促す。</p> <p>7・自分の家で家族の一員としてできることを考え、発表させる。その際に、夏休みに行ったお手伝いを参考に考えさせる。</p> <p>8・挨拶をした後に何をすれば良いのか指示を出してから終わりの挨拶をする。</p>	<p>6・小さな子どもが手伝いをしている様子を見て思ったことや感じたことを手を挙げて発表する。また、夏休みの宿題だったお手伝いを思い出す。</p> <p>7・自分の家で家族の一員としてできることを、夏休みのお手伝いを参考にして考える。</p>	<p>全体指導</p>	<p>○小さな子どもがお手伝いをしている写真に注目させる。</p> <p>○自分が夏休み行ったお手伝いを思い起こさせる。</p>	 <p>実際に提示したお手伝いの写真</p> <p>★家族の一員として自分ができていることを発表することができる。(発表)</p>
--------------------	--	---	-------------	--	--

(2) 授業の振り返り

今回の授業実践では、視覚的に見たり、実際に触れたりしながら体験的に学ぶことで理解を深めることができるという特別支援学級の児童の特性を一番に考え、「可能な限り本物に触れることで他国に対する理解を深めて欲しい」、という思いをもって授業計画を立て、実践を行った。

このようなことから行き着いたのが「校庭にゲルを建ててその中で授業を行う」というものであった。日本でゲルを貸してくれる方を探しまわり、費用の問題や輸送の問題等たくさんの困難に合い、なかなか見つけることができなかった。そんな中、私自身が宮城県石巻市にて東日本大震災のボランティアを行ってきた縁で、震災当時折りたたみ式ゲルを仮設住宅の代わりとして建てていた方とコンタクトを取ることができた。そして、教育の分野でゲルを使うことを喜んでくださり、快く受けて頂けることになり、今回の授業が実現した経緯がある。授業作りをしていく上でも人の繋がりを強く感じ、それが国際理解教育に繋がっていくことを改めて感じることもできた。子どもたちが実際のゲルを見て、中に入って体験することで身を以て日本とは違う生活や環境を知り、理解を深めることができたとともに、校庭にあんなにも大きなゲルが建っていたという事実が子どもたちの目に強烈に焼き付いたと感じている。その一方で、1年生から6年生までの児童が在籍する特別支援学級での授業であるため、学年ごとにねらいや評価基準が異なる中で一つの授業を展開していく難しさを感じた。

(3) 使用教材

第1時：「体験しよう！草原の国モンゴル」

20枚のカードをモンゴルの物と日本の物に分けて、パズルを完成させる。分けたカードを間違いなく並べることができれば、カードを裏返した時にそれぞれの国旗のイラストが完成する。



第2時：「行ってみよう！モンゴルのゲルのお家」

中庭に建てた折りたたみ式ゲル(ゲルの中には国旗や写真、民族衣装を展示。写真にはその写真から伝えたいことを一言コメント付きで掲示。)



第3、4時:「食べてみよう! モンゴル料理」

モンゴル伝統料理であるボウズを保護者と共に作り、食べる。モンゴルで購入したボウズの素を使って調理することでよりモンゴルに近い味を再現することができた。またスーターツアイの味も体験。



(4) 参考資料等

- ・独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「領域・教科を合わせた指導『生活単元』」
< <https://www.nise.go.jp/portal/elearn/seikatutangen.html> > (2014年8月30日アクセス)
- ・長崎県教育センター「はじめて特別支援教育にたずさわる先生方へ」
< <http://www.edu-c.pref.nagasaki.jp/syogaizi/syogaizi.htm> > (2014年8月30日アクセス)

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

児童の反応(日常生活の中での会話から出てきた言葉)

- ・「先生、昨日テレビでモンゴルみたよ!」 「昨日おばあちゃんとお相撲さん見たよ。」
- ・「モンゴルって日本よりもっと寒いのかな?」 「モンゴル料理また教えてね!」

日頃の会話の中からモンゴルについて話してくれる子どもが増えた。図書の間には自らモンゴルのことが書いてある本を探して読んだり、モンゴル料理を調べたりする児童もおり、興味をもって質問してくるが増えた。また、月に1回程度行っている外国語活動では学習した単語について、英語だけでなく「モンゴル語では何て言うのかな?」などと言語にも興味をもっている。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

保護者の反応

- ・モンゴル料理体験の影響からか翌日から家で食事作りを手伝うようになった。
- ・大人の私たちも授業を見て楽しかった。モンゴルの生活から大切なものが見えて良い。
- ・帰宅してから子どもが、習ったことを楽しそうに話してくれた。親である自分自身も楽しかった。
- ・ゲルの展示がとても良かった。今までにない体験をしているような授業だった。

成果

- ・理解を深める為にできる限り本物を使って授業を行うことで興味や関心をもつことに繋がった。
- ・「衣食住」をテーマに五感を使ってモンゴルを感じることで、自分の生活との違いに気付き、自らモンゴルについて調べたり興味をもって質問したりしてくるようになり異文化への、興味・関心を高めた。
- ・全校児童にゲルを解放し、体験させることで多くの児童がモンゴルという国を知り、そして日本との違いに気付き、異文化に触れるきっかけを与えることができた。今後も学校全体を巻き込んでいく。

課題と改善策

特別支援学級で全学年が在籍する中での国際理解教育の難しさを痛感した。焦点をどこに当て、何を身につけさせたいのかを、学年ごとや児童一人一人の特性によってもっと細かく考え、発達段階に合わせた活動を行う必要がある。その為に、場合によっては学年ごとに分けて授業を行うことで理解を深める。将来を担う子どもたちに国際的な視野をもたせるためには学校全体で異文化に触れるきっかけを作り、取り組んでいくことが重要である。そのために、地域に住む外国人の方、外国籍の児童やその保護者と連携しながら様々な形、方法で国際理解におけるアプローチを行っていく。

10 教師海外研修に参加して

この研修では校種も専門教科も違う先生方と活発な意見交換や情報共有ができたことが利点だ。同じものを見たり、聞いたり、体験したりしても感じ方が異なり、そこから自分の考えを深めることができた。素晴らしい仲間ができたことは私の一生の宝だ。また、たくさんの人と出会う中で、国際理解に必要なのは「人と人がより良い関係で繋がっていくこと」であると感じた。人との繋がりの中で相手を理解し、受け入れ、自己を振り返ることができる。そしてそこから日本の良さを見出ししていくことができる。このような視点も大切にしながら今後の授業実践に生かしていく。

また、今回の授業実践を学校公開日に設定したことにより保護者や地域の方にも途上国の生活を知ってもらい、国際理解教育の大切さを知るきっかけを作ることができたことも成果の一つであった。